



Title	指示詞 : 朝鮮語이·그·저系列と日本語コ・ソ・ア系列との対照
Author(s)	田村, マリ子
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1978, 12, p. 3-14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56494
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

指示詞

—朝鮮語 이・그・저系列と

日本語コ・ソ・ア系列との対照—

田 村 マリ子

I

この小稿は、主体がいかなる場面において素材を言語表現していくのか、に興味をもち、そのひとつとして、指示詞に焦点をあてたものである。方法として、日朝対照言語学の立場から考察していく。

朝鮮語には、コ・ソ・ア相当の指示系列がある。이/i/「この」・그/ki/「その」・저/ĕə/「あの」である。これらは、大きな造語能力をもち、コ・ソ・アと同じく、広く他品詞にまでわたっている(図表①)。

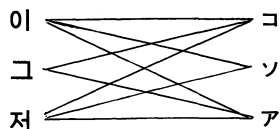
図表①

範疇 概念	関 係 概 念			品詞
関 係	이「この」	그「その」	저「あの」	冠形詞
物	이것/iko/「これ」	그것/kiŋo/「それ」	저것/ĕko/「あれ」	代名詞
場 所	여기/joki/「ここ」	저기/kiki/「そこ」	저기/ĕki/「あそこ」	代名詞
方 向	여리/iri/「こちらに」	그리/kiŋi/「そちらに」	저리/ĕŋi/「あちらに」	副 詞
様 態	이렇다/ilok'ha/「このようだ」	그렇다/kiŋok'ha/「そのようだ」	저렇다/ĕok'ha/「あのようだ」	形容詞
	이런/ilan/「こんな」	그런/kiŋan/「そんな」	저런/ĕlan/「あんな」	冠形詞
	이렇게/ilok'he/「こんなに」	그렇게/kiŋok'he/「そんなに」	저렇게/ĕok'he/「あんなに」	副 詞

次に、日本文学の朝鮮語訳・朝鮮文学の日本語訳の翻訳例からその対応の仕方を見ると、이がコ・ソ・アと訳されていたり、그がコ・ソ・アと訳されていたり、저がコ・ソ・アと訳されていたりした(図表②)。

これは決して両国語の指示詞がいい加減に対応したのではなく、主体の素材との関係において体系的に違いをもつためと考えられる。つまり、同

図表②



じ三系列をもちながらも、両国語の指示詞は関係概念などの捉え方に違いを示すためであろう。

国語においては、佐久間鼎氏以来、指示詞をコ・ソ・ア・ドの体系として把握することに関して、かなり定説に近いものが出されている、といわれる。例えば、次のようなものである。

(1)コは話し手の領域をさし、ソは聞き手の領域をさし、アはそれ以外をさす。

(2)コ・ソ・アは三つが並立的に対立するのではなく、コ・ソの対立及びコ・アの対立という二重に重なった二対立である。

ごく最近、これらに対し、阪田雪子氏⁽¹⁾ や堀口和吉氏⁽²⁾ から疑問が出されている。

朝鮮語においては、이・고・저を指示詞として一括し、捉え論じたものはないようであるが、文法書に指示代名詞の記述があるので参考にする。

(A) 이…話し手に近い・親しい	
고…聞き手に近い・親しい	
저…話し手・聞き手から遠い・親しくない	『우리말본』 ³⁾
(B) 이…話し手に近い	
고…聞き手に近い、話にのぼった	
저…少し離れている	『문화어학습참고서』 ⁴⁾

(A)の対の「親しくない」及び(B)の対の「少し離れている」という表現が、やや異なるが、全体にコ・ソ・アと同じく、話し手と聞き手による関係概念として把握記述されているといえよう。しかし、なぜ、このように似通った記述をされるコ・ソ・アと **01・2・저** が図表②におけるような対応のずれを示したのであろうか。

佐久間鼎氏以後の主流を占める説に対して、氏以前に説かれていた近・中・遠称として捉えるみかた、及び阪田雪子氏や堀口和吉氏らの指摘は、コ・ソ・アを話し手と聞き手で作る関係概念としてみるか、聞き手を意識せず話し手に重点をおいてみるか、の違いであるといえよう。確かに言語活動において最小限、話し手と聞き手は必要である。しかし、言語の機能のひとつとして、対人無指向的な「表現」があり、指示詞においても、聞き手を意識しない話し手中心の表現行為は行なわれるものと思われる。そこで、試みに、(1)話し手、(2)話し手と聞き手、の2つの視点から考察してみようと思う。

例1 ココニイラッシャイ。

例2 ネェ、コノ部屋寒クナイ？

例1のコは話し手の領域、例2のコは話し手と聞き手の領域である。

例3 ソノ本アナタノ？

例4 (2人並んで)

ソコノビルノ歯医者サン上手ヨ。

例5 (独白で)

ソコノ窓カラ出テイキタイナ！

例3のソは聞き手の領域、例4のソは話し手と聞き手の領域外、例5のソは話し手の領域外である。

例6 アノ建物立派ネ！

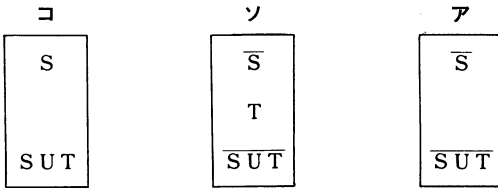
例7 (独白で)

アノ山ニ登リタイナノ

例6の \mathbf{A} は話し手と聞き手の領域外、例7の \mathbf{A} は話し手の領域外である。

以上を、簡単な集合の記号を使って図表に示してみる(図表③)。 $A \cup B$ はAとBの和集合、 $\overline{A \cup B}$ は $A \cup B$ の補集合を表わす。Sは話し手、Tは聞き手である。

図表③



図表③からソとアの違いは、話し手あるいは話し手・聞き手と指示物との離れ具合であろうこと、及び、ソは聞き手の領域をも表わすことであるとわかる。

さて、ここで示したコ・ソ・アは現場指示(空間指示・眼前指示ともいわれる)とよばれるものである。指示詞はあらゆる空間・時間にまたがって指示の場をもつ。本稿では、現場指示と文脈指示に分けて考察する。「現場指示」とは、時間の流れを超越し、同一空間における話し手と聞き手が、共有する場面において両者共に知覚しうる具体的対象物に関する指示をさす、あるいは、話し手が空間における知覚しうる具体的対象物に関する指示をさす。「文脈指示」とは、話線のまたは記憶的な文脈に関する指示をさし、単に文章として書かれた文脈に関する指示のみをさすのではない。

以上を考慮しつつ、対象作業を行なう。

II

1 — 現場指示

① 日朝を対照した指示詞に関する研究はほとんどないが、梅田博之氏が簡単にふれているので参考としたい。梅田氏によると、「…コノ、ソノ、アノの示す領域範囲は……近称・中称・遠称つまり距離の遠近によるちがいに基づくといつてよいようです。ところが朝鮮語の이、그、저はどうもそうではないようです。……。朝鮮語の이、그、저は、コレ、ソレ、アレと異なり、第一人称者の領域にあると認められる場合に、第二人称者の領域に属すると認められる場合に、そのいずれにも属さない場合に저を使うと規定されそうです¹⁵⁾」とある。簡単に示すと、

(梅田氏による)

이 … 話し手の領域 (S)

그 … 聞き手の領域 (T)

저 … それ以外

となるが、これはIの(1)と何ら差異は認められない。梅田氏自身が、コ・ソ・アをIの(1)のように認めていないところに問題があると思われる。

例8 「待ちなさい。そこの店に立ち寄るから」と、父はちょうど通りかかった商店街の洋服店にさっさと入って行った」(換歌)

例9 「そこの、石堀の横をまがって四軒目の池田といふ表札の出ている家ですの。」(山の音)

この2つのソは朝鮮語では저と訳されている¹⁶⁾。ところが、Iの(1)に従えば、ソは聞き手の領域を表わすのであるから、梅田氏の定義によれば朝鮮語ではコとされるべきである。阪田雪子氏は、

例10 「あわてるな、横断歩道はそこにある」

という例文をあげ、話し手と聞き手が同一の場コを形成し、その同一の場コからアほど遠くないものとしてのソを指摘している。更にIの(B)の『문화어 학습 참고서』では、저は「少し離れている」と記述されている。

以上より、ソは「話し手・聞き手から少し離れている領域」と規定され

よう。それに該当するのは朝鮮語では**저**といえよう。

図表④

ソ	話し手・聞き手から少し 離れている (SUT)	저
---	----------------------------	---

㊦ 次に、㊤の梅田氏によると、**ㄱ**は聞き手の領域に属するもの、とあるが、果たしてそう言い切れるだろうか。

たとえば、対座していて、未知の人が聞き手の隣り近くにいるとしよう。この時、日本語では、「その方はどなたですか」とたずねることが可能である。ところが、これをそのまま朝鮮語に訳して、**ソ**を**ㄱ**とすることはできない。聞き手近くに人がいても、**ㅇ**を用いる。これは恐らく、対象となる人を、話し手と聞き手共通の領域 (**ㅇ**) に属すと認めためと考えられる。

物の場合はどうであろうか。聞き手が話し手からどんなに離れていても、聞き手近くの物は聞き手の領域に属すと認められ、**ㄱ**を用いる。

以上より次のようにいえる。日本語において、人・物に関係なく話し手近くにあれば話し手の領域と認め、**ソ**を用いる。それに対し、朝鮮語においては、人か物かで使いわけをする。人であれば話し手・聞き手共通の領域 (SUT) と認め、物であれば聞き手の領域と認め**ㄱ**を用いる。

図表⑤

ソ	聞き手の領域 (T) : 物	ㅇ
	" " : 人	ㄱ

しかし、なぜ、朝鮮語では対象が人であれば話し手・聞き手共通の領域とみなし、聞き手の領域とみなさないのであろう。恐らく、敬語意識とからんでくるのではないか、と思われる。日本語は、相手との関係を意識す

る相対敬語であるといわれる。ところが、朝鮮語は絶対敬語とよばれる面をもち、たとえ尊敬されるべき聞き手に属するものでも下称が用いられたり、話し手に属するものでも上称が用いられたりする。対象となる者は話し手、聞き手に関係なく超越しており、社会構造を背景にして扱われるべきものなのである⁽⁷⁾。このような敬語意識の違いが指示詞の中にも差異として現われてきているのではないだろうか。

◎ 話し手・聞き手から遠く離れた**対**及び**ア**に問題はなさそうである。ただし、Iの(A)の「話し手・聞き手から親しくない」という記述が問題である。

指示詞を単に距離上の問題とみなさず、心理的な領域とみなしたことに、佐久間鼎氏以来の諸説の意義があったと思う。それでは、**ア**はどのように定義づけられているのだろうか。

佐久間鼎氏⁽⁸⁾は、**ア**を、「話し手・相手のどちらにも近いが親しいかの関係を離れて指すもの」と規定したが、話し手と対象物（のみ）の関係についてふれていない。

Iの(2)によれば、**ア**は**コ**と対立するものである。井手至氏は、次のように説明する。**コ**と**ソ**が「社会（対人）的言語性」を有するのに対し、**コ**と**ア**は「自己中心語（内語）的言語性」を有し、「話し手が自分自身に言い聞かせる独語、または言語のかたちでは発せられない内語、沈黙考のことばを成立せしめる場として存在」し、「聞き手は話し手自身であってそれ以外の何者でもない⁽⁹⁾」、と説いた。これは、**ア**の場における話し手・聞き手の空間的距離あるいは心理的距離の近さを説いてはいるが、話し手と対象物との心理的関係についてふれていない。

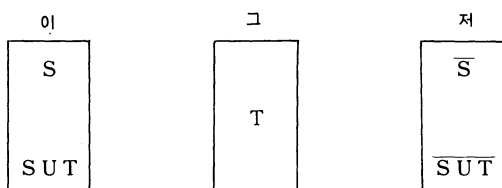
堀口和吉氏は、「**コ**・**ソ**・**ア**の三つの表現性のちがいは、いわば、親近・疎遠・親遠のちがひ …」であり、「**ア**の表現は、遙かな存在を自分に関わりが強いとして指示する表現である。⁽¹⁰⁾」とする。そして、**コ**・**ソ**の対

立を親近・疎遠の対立、コ・アを親近・親遠の対立ととく。しかし、ソとアを疎遠と親遠と区別する根拠があいまいである。

現場指示において、アは、話し手から遠い、あるいは、話し手・聞き手から共通に遠いとだけ定義すればよいのではないか、と思われる。

朝鮮語の場合はどうであろうか。㉠では、저は、話し手あるいは話し手・聞き手から少し離れているところ、ソの領域と重なる部分も指示した。㉡では、コが聞き手の領域に属した。朝鮮語では、梅田博之氏も指摘するように、話し手を中心に이・코・저の3元的対立はなく、이と저の2元的対立をするだけである。以下のような図表となる。

図表⑥



저は、話し手の領域外、あるいは、話し手・聞き手共通の領域外をさすので、I (A)「親しくない」の定義は妥当であると思われる。

図表⑦

ア	話し手から遠い	저
	話し手・聞き手から遠い	
話し手にとって親しくない		
話し手・聞き手共通に親しくない		

2 — 文脈指示

現場指示が現場における知覚できる具体的な対象物を指示する用法であるのに対し、文脈指示は、話線のあるいは記憶的な文脈に関する指示をい

う。しかし、この両者は、はっきりと線を引いて区別できる概念ではない。例えば、会話の途中で聞き手を無視し、まるで対象物を目の前に描き出すが如く回想にふけることがある。「あの人は誰だったろう」このアは空間における話し手から遠い領域を表わすアとも解釈でき、また時間の流れにおいて遠い領域を示すアとも解釈できる。三上章氏は、「アレはいつも Deictic であって、眼前指示や文脈指示も同じはたらきのように思われる⁽¹¹⁾」、と指摘する。

文脈指示におけるコ・ソ・アの用法について、現場指示ほどははっきりとした形で定義づけされてはいないようである。その中で、久野暉氏は、経験をひとつの示標とし、用法を区別している。引用すると次のようになる。

(C)ソ…「話し手自身は指示対象物をよく知っているが、聞き手が指示対象をよく知っていないだろうと想定した場合、あるいは、話し手自身が指示対象をよく知らない場合…」

ア…「その代名詞の実世界における指示対象を、話し手、聞き手ともによく知っている場合にのみ…」⁽¹²⁾

この他に、ソ・コは先行叙述・後行叙述として用いられる。

さて、具体的に、朝鮮語との対照を試みる。

梅田博之氏によれば、朝鮮語においては、「一度話題にのぼったものはすべて区別なくコで表現する …⁽¹³⁾」。つまり、Iの(B)のコの定義と重なる。日本語で、IIの(C)のように、ソ・アと区別するものが、朝鮮語において表現されない、ということである。それならば文脈指示において対はどのような用法をもつのであろう。

例11 秘園に行ったことがありますか。

- (ア)いいえ、そこに行ったことがありません。
 (イ)はい、そこに行ったことがあります。

(イ)はコでも対でもよいが、(ア)はコであって対は使わない。

例12 美術学校の学生と知りあいになりましたよ。

- (ア)その人どんな人。
 (イ)その人ね、とてもすてきよ。

(イ)はコでも対でもよいが、(ア)はコであって対は使わない。

以上より、対は話し手が対象物をよく知っていて、それを特に強調する時に、まるで目の前に描くがごとく叙述する時に使われるのではないか、と考えられる。現場指示の用法において、対が話し手の領域 0I と対立し、親しくないと定義した (図表⑦) ように、話し手と対象物との緊張関係が考えられる。更に、時に関して、저때 (あの時) という言い方が標準語になく、すべて 그때 (あの時・その時) と表現するのは、時間というものがどこで切るということのできない連続体であるから、0I と対の緊張関係を生みださないのではないか、と考えられる。

3-1 指示詞による他の表現法

㉑ 対句表現

指示詞の造語法において興味をひくものに対句の表現がある。三上章⁽¹⁴⁾氏によれば、

1. **ア・コ** (例：アチラコチラ)
2. **ソ・コ** (例：ソコココ)

の対句表現は存在するが、**ア・ソ**の組み合わせは現代語にはないという。朝鮮語では

1. **0I・저** (例：이러저러 /iləkčələk/ 「どうやらこうやら」)
2. **그・저** (例：그러저러 /kələkčələk/ 「どうやらこうやら」)

の対句表現は表裏してあるが、이・그の対句表現はない。

また、日本語の対句表現において、表現の動きが自己に向かって求心的に(→コ)表現されるのに対し、朝鮮語のものは非求心的(0|→)に表現される。以上の点に差異がみられる。

㊦ 複数の表現

日本語には複数を表わす接尾辞「-ら」があるが、朝鮮語にも「·들/til/(-ら)」がある。しかし、指示詞について複数表現する時、接続する位置がちがう。

1. この鉛筆 이 연필 /jɛnp'il/
これらの鉛筆 이 연필들 /jɛnp'ilt'il/
2. この女 이 여자 /jɛčə/
この女ら 이 여자들 /jɛčət'il/

以上の点に差異がみられる。

III

日本語と朝鮮語の指示詞は、形態として三段の区別をもっているが、今回の考察によって、現場指示や文脈指示、その他の表現法において違いがあることが、わずかではあるが明らかになったと思う。

現場指示においては、コ・ソ・アの定義自体に若干の問題があった。まず、話し手を中心としてコ・ソ・アという三対立があるとするみかた、これは、対照作業によってそのソの領域が저と対応していることがわかった(図表④)。つまり、저は話し手及び話し手・聞き手の領域外にあたる(図表⑥)。話し手の領域を表わすソは朝鮮語では、人か物かによってコと저で対応した(図表⑤)。以上より、話し手及び話し手・聞き手を中心としてコ・ソ・アと三対立の可能性を含むものが、朝鮮語では이と저の二対立を示すこと、コは聞き手の領域、それも物に関する時だけであること、が明らかになった。

文脈指示においては、話し手・聞き手の共通の領域であればア、そうでなければソと区別されるものが、朝鮮語では区別されず、ただコのみに対応した。その上に、更に、対を使う時には、話し手と対象物との緊張感を示した。ところで、かなり日本語のよくできる朝鮮の学生でも、このアの使い方においてよく失敗するようである。聞き手は何も知らない対象物をアでさすのである。ソはあまり使わないようである。恐らくアとコを同一視しているのではないか、と思われる。

その他の表現法においても若干、違いがみられたが、簡単に指摘のみにとどめた。

注

- (1) 阪田雪子「指示詞「コ・ソ・ア」の機能について」『東京外国語大学紀要』21.
- (2) 堀口和吉「指示詞「コ・ソ・ア」考」『論集日本文学・日本語』5・現代、角川書店、1978.
- (3) チウエヒヨンベ 최현배 『ウリマルボン 우리말본』、チヨナムサ 정음사、ソウル 서울、1975.
- (4) 『ムヌクハクスアプチャムゴン 문화어학습참고서』、キミルソンチヨンハプテハクチュルボンサ 김일성종합대학출판사、ピョングヤン 평양、1973.
- (5) 梅田博之「朝鮮語と日本語」、『朝鮮学報』69、朝鮮学会、1972、p. 39.
- (6) 川端康成著、柳昞譯 「山仝리」、川端康成全集2、新丘文化社。
原田康子著、全芝郷譯「挽歌」、日本文学全集7、東西文化院。
- (7) 浜田敦「敬語」、『朝鮮資料による日本語研究』、岩波書店、1970.
- (8) 佐久間鼎『現代日本語の表現と語法』、厚生閣、1936.
- (9) 井手至「代名詞」、『続日本文法講座1 文法各論集』、明治書院、1959、p. p. 121~122.
- (10) (2)に同じ.
- (11) 三上章「コソアド抄」、『文法小論集』、くろしお出版、1970、p. 149.
- (12) 久野暲、「コソア」、『日本文法研究』、1973、p. 185.
- (13) (5)に同じ、p. 40.
- (14) (10)に同じ、p. 147.